

タミル文字

山下 博司

タミル語はドラヴィダ語族に属し、文字も丸みを帯び、北インド系の文字と一見しておおいに異なる印象を受けます。しかし、タミル文字は、紀元 4,5 世紀に北方系のブラーフミー文字を基礎に成立しており、デーヴァナーガリー文字などと多くの特徴を共有しています。文字には母音字と子音字の区別があり、それぞれ 12 文字、18 文字を数えます。子音字はもともと a 音を含み、これを別の母音にかえるとき、母音記号が子音字に付加されます。(子音字のみを表記する場合は、文字の上方に「プッリ」と呼ばれる点を打ちます。) 大文字・小文字の区別がなく、文が左から右に向かって書かれ、原則として単語と単語の間にすき間を設けることも、デーヴァナーガリー文字などと軌を一にしています。これらのほか、サンスクリット語からの借用語を表記する際に、グランタ文字に由来する 5 個の特殊な文字が併用されます。

タミル語には、二重子音はあるものの、異なる子音から成るクラスター(連続子音)が基本的に成立しないことから、デーヴァナーガリー文字などに見られるような結合文字はありません。また、タミル語には、インド・アーリヤ諸語におけるような有気音と無気音の対立がなく、また無声子音の語中で一般に有声化することから、たとえば、サンスクリット語やヒンディー語の k(a), kh(a), g(a), gh(a) にあたる音は、すべて同じ文字(𑌕)で表されます。このように、タミル語は、インドの他の言語に比べて、文字体系が単純で、文字の総数も少ないのが大きな特徴となっています。個々の文字が独立して書かれることもあり、読み書きするのが比較的容易な言語といえます。

日本語の「こんにちは」にあたるタミル語は「ワナッカム」です。

வணக்கம்
vaṇakkam

この語は、一日中いつでも用いることができます。あえて朝(kālai)や晩(mālai)の語を冠して、「おはよう」や「こんばんは」を[kālai vaṇakkam]、[mālai vaṇakkam]ということもありますが、あまり一般的ではありません。「ワナッカム」は、動詞「ワナング」(= 祈る、拝む、腰をかがめる、挨拶する)から派生した名詞で、もともと「崇拜」「お辞儀」「敬礼」を意味します。

数字は、古典文献の校訂出版などを除いて、現在算用数字しか使われていません。

[参考文献]

- 中西亮「タミール文字」、『世界の文字』、みずうみ書房、pp.36 - 37, 1975.
- L. ルヌー・J・フィリオザ(山本智教訳)『インド学大事典』、第3巻、金花舎、1981.
- 山下博司「タミル語」、『インド通信』、第129号、pp.1 - 3, 1989.7.

(町田和彦編著『華麗なるインド系文字』白水社 2001, pp. 196-197 より転載)